企画案内

問題提起のために

———私と私の友は知っていたのであろうか？祭がもう幾度も死んだことを！
様々な理から現在、祭はリクレイムしか知らない。　　いつ果てぬ果てぬならばこの宴。

徒花　　奔りて……

まことに旅立ちとは戦後の生理とも云うべき世代のもつ自虐であった。
はるか蒼芒の彼方、褥野をめぐる一陣の朝霧こつぜんと現われる滅びの舞いに腕をむすぶゆるされてふさわしい出発。

暴虐の雲光を覆い、敵の嵐は荒れ狂う
ひるまず進め我等が友よ、敵の鉄鎖を打ち砕け
自由の火柱輝かしく、頭上高く燃えたちぬ

今や最後の戦いに、勝利の旗は翻めかん
起て同胞よ行け闘いに　聖なる丘にまみえよ
砦の上に我等が世界　築きかためよいさましく

佇むことと越えること、黄昏と引く潮の間に、一瞬の殺戮をそこねて数千の闇が過ぎ去った。
縋がりつく、すすきの原に舞う鳥の、病みつき方、何処にある北の顔

徒花の狂い咲きでしかない私の刻が、くびり残されたまま白昼さんざめく宴の中に見様に吸いこまれていった現在、なお遠ざかりゆく風景を凍りつく空に葬り、吹く風に吹く風に葬り流す恋唄は刻む言葉と私をなおも老残の彼方へとおしやってしまった。まことにこの数年の闘が自らに強いた空漠に賭ける不安と焦燥は〈個〉のあがないを現の営為の中でくずれだすのに十分足りていた。私は私と世代の悲劇を云っているのではない。来るべき日になって、私と世代の暗うつが抗うにたるなにものもないことに悲しませるのである。
死にきれぬ風景のほてりが放置された刻の中に暗いまなざしで息づくとき、縮みゆく思惟の果てに出生を憎悪し切り歩くことでしかない私の営為は「戦いとは何か　戦場とはどこにあるのか」という想いを、そこここに葬っていた。
朝日のさしそめる刻に、その永遠に豊かな刻に終るという生成の恋唄を淡い自虐のゆきずりで、あるいは吹く風に流すつぶやきの中に見果てぬ幻との心中を夢みて私の旅立ちとしていた。

旅立ちとは戦後の生理とも云うべき世代のもつ自虐であった。
垣間みた恨みつらみを風に流してあるいはすれちがった泡沫の行末にゆきずりの自虐をはなむけるという、かりそめの往来であったと慕われる。
「荒地」が終末の暗さからいやおうなく流れる刻に裂かれた皮膚のうずきを喪いつつある頃、私は生れた。全ては街から始っていたと他人は云う。近代がその奥底において濾過することの出来なかった

悲しみの地盤を抱えもったまま戦後という土壌は街をつくり夜明をむかえた。なす術を知らぬ私は、この案外難しくないせいそくに身をゆだねこの悲しみの地盤を肯うための無頼の唄を行く風に流し果無い萠を追った。したたかな滅びの舞いに腕をむすんだのはまたそうした日々であった。

たえまのない生きはじの中で真紅に咲いたハマナスの花を慕う恋唄はある時の己れを荒ぶる闇の中で悲しくさせた。さすらいの唄を風に流して暁を奔らねばならぬと慕う心がおそらくは時代の四辻にめぐりあわぬだろうことをたわめた私怨にとって果無い徒労とやはり云わねばならぬ。

好むと好まざるにかかわらず旅立ちはあった。ある者は流れ去る風景にエレジーを編んで揺れたと聞き、あるものはうずくまりかいくぐり垂直に下降したと聞く。語られて久しいこのことをことさら私があげるのは外界内面そして現象抽象と様々な追求の中で強いられてある唯一のことは「生きてきた」という刻の持続の中での出来事だった。あらゆる出発は反問され又反省され、ある夢の象はそこなわれ戦いよりも悲惨な風俗の片鱗におしやられていったのである。

「存在があるがままのものとして開示するとき即ち主体が五感（諸感覚）の中でそれを現実化するとき、それを出会いと呼ぶ。その時予期される衝撃は認識の進展に供い、いわば他者でしかないという自覚と供に流れる風景に転化してゆく。〈出会い〉は次への約束ではなく限りなくつづく自己欠落の検証にすぎない。」〈出会い〉果無い萠は淡い自虐のゆきずりでまたも徒労でしかないことに滅びに向かう恋唄は又哀しまねばならない。

昭和22年街がしたたかさを取りもどそうとしている時、巷に流れていた風はこの唄であったと他人はいう。

「星の流れに身を占なって、処向を寝ぐらの今日の宿
すさむ心でいるのじゃないが、泣けて涙も枯れはてた
こんな女に誰がした」

……奔りて　　仇花へ……

いかなる場合にも廃屋に佇む調和は堕ちていった物具の風ぜいではなく秘そやかに咲かす仇花でなければいけない。私はそれをいつくしむ。ねばならぬと慕う心がたとえ仮寝のたたずまいといえど風景を回る旅人の所作として持とうと、やはり私は云わねばならぬ。

戦後は裏切りとしてではなく、吹く風に葬りつづけた刻の恐しさとしてあった。裏切ったあなたを求めて「君の名は」と尋ねることはとほうもない徒労であったと慕われる。

「君の名はとたずねし人あり
その人の名も知らず
今日砂山に　ただひとり来て
浜昼顔にきていてみる」

あなたを尋ねれば救われるというのは余りにも虚しい。夢の中にあたなをみても流れる刻が忘れさせる。真知子でもないしエメロンを持ったあの娘でもないのだ！

「こんなに美しい朝もあるのよ」たった一つの言葉だけれど一度でいいから言いたかった。
嘘で固めた現実に嘘に優しいこの私　なんでこの世を生きぬけぬのか。
昭和22年のリルは戦後の落し子　　Lie—La—Lie　嘘で　嘘で　嘘で……
上海みあげの恨みつらみを風に流して切り渡る。オテナの塔も知らないし世界同時革命も知らない。
　嫌気で流した無頼の唄に夢の象が在ったのか
　洗い晒しのこの身を背負い、どこで咲いたか残り花
「海を渡って来た　　一人ぼっちで来た
希望すてるなリル　　上海帰りのリル　リル
暗い運命は二人でわけて　　共に暮そう昔のままで
リル　リル今日も逢えないリル　誰れがリルを知らないか」

暁けゆく日本の高度成長は昭和22年に上海からもどったリルを変えるのに十分であった。わずかに刻に抗して視すえる姿勢に耐えるという人々がある決意と共に彼らの世界へ入っていき、ある人は初期ノートを残し刻に流れる抒情を切った。又ある人は論理へと身をゆだねたのである。それが彼らの倫理であろうことは吹く風にまかせ恋唄を編んでいた私にはおそらくは二度とは会えぬ彼方であったろう。

ハマのキヤバレーで海を見ていたリル本牧で育ったことが女に未通女を慕いだされる。
信じちゃくれない真紅な血で　グラスにつがれたミリオンダラー
紅い色は信号ばかりじゃない　ヘルメットだってそれに私の血だって、そうなのよ　ほら！
叫んでみたい　When I was youug……　　Mmmmmm　　Mmmmmm……
「みんなあんたが教えてくれた　酒も煙草も嘘までも……」
この身まかせて生きてくことがたった一つの人生ならば　みんなあんたにまかせるわ！

私はまかせてしまう女のしたたかさを信じる。その意味で戦後は女の生じであった。大戦の敗北に男が路踏でまようとき、まず生きる術を視つけたのは、紅いルージュをつけた女だった　女は犯すことはできない　犯されることによって生きていくのだという理の中で近代の悲劇の土壌はついにあがなうことのないまま　赤いリンゴを口ずさむ女の中へ滑り込んでいった。
「あんたにわかるかこの気持　踏まれても踏まれても私にはこうするしかなかったんだよ！」
いうまでもなく日本の近代の叫びがここにあった。けなされても馬鹿にされても生きていくしかない日本の民衆の叫びはいかなる知識人の警告をもふりすてて甘く切ない古賀メロディーに乗せて流れてやまない。
唐という男はしたたかな毒を持って生きる術を知った一人である。少女さらいの中で唐は少女が他者をもたないものとして想定している。いわば他者とは対立概念であって立ちはだかる絶対的な他者であり　この他者は相点によってしか生きる術を持たない、他者を持たない少女は同化することによって女になっていく、この一瞬の蹂躙で 300年を駆けぬける少女の姿に「生きながら死人となり果てて」という生の彼女へと躍り込む意得しか持てなかった彼を驚かせたのかもしれない。
そこに唐の戦後的旅立ちがあった。
「20世紀後半のそのまた後半に突入しつつある今……〈中略〉…暗黒と陽光を同時に支配する目をそしてその二つの駆けめぐるバネを手に入れなければならない〈腰巻お仙〉

劇中における唐は時には高石かつえであったり耳なし芳一であったりするわけだが、自在にその中を往来するものとして唐は情況の総和である。あやつる者が聞き手である観客をかどあかすとき唐の戦後に生きる必然がある。戦後に生きることの必然を他者をかぶくことによって得た唐はしたたかな旅立ちをした一人といえるだろう。

川端康成、人は彼を弔辞の名人と呼ぶ、ただ生きているという理を最も深部において視た戦後を歩む人であった。「横光君　僕は日本の山河を魂として君の後を生きていく」〈横光利一弔辞〉

これは川端の信念ではなく慕いなのであろう。「まだ生きていく」と云うことにおいて絶妙な淡く冴えわたった〈したたかさ〉を含んでいる。雪国の冒頭において書かれた「人物は透明のはかなさで風景は夕闇のおぼろな流れ」というくだりは人物と風景を同時にはかなくしていく、なじめない戦後の中で街々の風景もそこに生きる己れ自身をも淡くさせた人、これほどの人を私は他人に知らない。

対象とその表現の変様がなくそれゆえに限りなく主体が縛められていく、このことが固立した対象事物（風景）の美を淡々とした間に浮びださせるのである。そして彼は作品から遠のいていく、丸見えの戦後の中である旅人のえらんだ旅立ちは抒情という道をとうって生きる術を知ったのである。

いつくしみを語るしたたかさの背理は殊に私らの語る構造が今もっとも信じることのできないものであることはわかる。己れ一人の癒えのためにあるだろうこともわかるのである。語れば今いたずらな自虐でしかない私にせめて心地よいものを触っていたいと笑う慕いが支えているにすぎないと云えよう、———それは世代の生理かもしれぬ————人の世の正偽にてらされるならこのような営為が肯をうはずがない。

現在、私らは与えられた営為の中で4日間にわたる祭を追っている「北は晴れかしらそれとも雨か」と唄う圭子の背後に阿久がいたことは云うまい。昭和22年海を見て涙ぐんだリルがしたたかな街を経て営為まで売りわたきてしまったことに、必敗のゆきずりの中で私らが同じく背後に秘む阿久の恋唄で葬むらねばならぬことに…

「何故にむすばれないのか
出会うのが遅すぎたのか
人前でくちずけたいと
心からそうおもう
せつないだけの恋唄」

ただ私らが言葉を持たない悲しみより、営為の刻の流れが背後に居るあやつりを拒絶しては無いことに限りなく滅びにむかう行末としてどこまでの闇だれの末裔であるかを又淡く涸れさせていくことに、ふっと哀しさをかくしきれない。

縋がりつきたい縋がりたい、鬢のほつれに慕いをこめて……
「赤い靴」でハマジルを踊ったリルよ東京23区の戦後をぶらさげて、サイコロ片手に旅に出た。2番電車か3番電車にゆられて遠くオホーツクの海を見ている。本牧でカモメになったあの娘はリルじゃない　紅いランタンも忘れた。黒いドレスも着ちゃいない、悲しさで死んだ娘なんてリルじゃないんだ。だから未通女はもう忘れた。